

翻刻と解題 慶長三年二月「連歌・和歌会書留」・

慶長五年「陪八月十五夜月宴歌合和歌」

大 利 直 美

*キーワード

新川盛政・堺連衆・百韻連歌・法楽和歌・紀州玉津嶋・泉州蟻通明神

ここに翻刻紹介する慶長三年二月の「連歌・和歌会書留」と慶長五年の「陪八月十五夜月宴歌合和歌」は、三千点に及ぶ文書群、中庄新川家なかのしょうぢがわけ文書（以下、新川家文書と略す）の一つである。同家の三代目当主新川盛政は堺伝受を受けた歌人・連歌作者であり、多くの文芸作品が現存する。このうち「連歌・和歌会書留」は、新川盛政が堺の連衆と一座したことを示すものであり、また「陪八月十五夜月宴歌合和歌」は、新川家の親族等が関ヶ原の合戦直前に集って和歌会を催したもので、いずれも貴重な資料である。新川家文書は個人所蔵で、原本閲覧が難しいうえ、特に前者は虫損が甚だしい。それゆえ、ここに翻刻紹介し、若干の考察を加える。

【解題】

I 慶長三年二月「連歌・和歌会書留」

表紙は柿渋色、二五・五糎×一九・二糎。外題、内題はない。料紙はすべて楮紙で、全二四丁あり、遊紙はない。虫損が甚だしく、一部判読が困難である。各丁は、一丁に七行から八行記されている。本文は一筆と推定され、百韻の連歌三巻と続歌十五首和歌を一冊に収めている。百韻三巻それぞれの端作には、賦物と日付と張行場所が書かれている。これら作品に、それぞれA「蟻通明神法楽連歌」、B「市川九閑宿連歌」、C「和歌山映森宿連歌」、D「玉津嶋奉納続歌十五首」と、私に記号と仮題を付して、以下、検討を加える。

このうちAとBは、新川家文書の他に、大阪天満宮文庫蔵の二種類の写本「古中古連歌千六百句」（れ・甲14）、「連歌七百韻」（れ5・17）に収

載されている。新川家文書本は、料紙の古さ、筆致・筆跡等からみて、新川盛政か、その周辺で書写された写本と推定され、その成立は近世前期を下らないものであると考えられる。原懐紙ではないにしても、大阪天満宮二種の写本よりも古体に近い形を伝える写本と推定される。次にそれぞれについて解説を加える。

A 「蟻通明神法楽連歌」

慶長三年（一五九八）二月二十三日「何船百韻」。端作には「於宮内小輔宿」（天満宮写本二種では「於新川宮内少輔宿」）、「蟻通明神へ法楽」とある。

「宮内小輔」とは連衆「盛政」＝新川盛政のことであるから、和泉国日根郡中庄（現大阪府泉佐野市）の新川邸で近郊の蟻通明神（現同市長瀬）に法楽するために行した百韻であろう。「花もありとを、しつれかはつ桜」と宗柳が発句を詠み、祐心が脇句を詠む。第三は盛誓が詠み、以下、空盛・盛政・賀月・頼長・箕庵・英剣・九佐と一巡し、後に盛勝が加わる。なお、日付の順からすると、本来最後に収められるべきAが最初にあるのは、この一冊が新川盛政またはその周辺でまとめられたものだからであろう。

B 「市川九閑宿連歌」

同年二月十九日「何人百韻」。端作には「於市川九閑宿」とある。「和歌の浦や松に残りの雪もかな」と宗柳が発句、脇句を亭主九閑、第三を盛誓が詠む。以下、祐心・盛政・空盛・宗也・一友・良鉄・重世・九佐と一巡する。なお、この百韻は、末尾の五句が記入されておらず、九五句で

終わっているが、大阪天満宮写本二種も同じく九五句で終わっているの
で、「書留」と天満宮写本ともに同系統の伝本であることが判明する。満
尾で終了したものの、書写の過程で失われたのであろう。

C 「和歌山映森宿連歌」

同年二月二十一日「何船百韻」。端作によって「和歌山森宿」で張行さ
れた連歌であることがわかる。宗柳が「浜の名も千里もかすむあしたか
な」と発句を詠み、脇句を亭主映森、第三を祐心が詠む。以下、小泉・九
閑・空盛・盛誓・盛政・宗也・良鉄・九佐と一巡し、後に恵休・友清・元
泰・祐之が加わる。

D 「玉津嶋奉納統歌十五首」

同年二月二十二日、統十五首和歌。部立は春一〇首、雑五首。玉津嶋明
神への法楽和歌である。巻末に「陪玉津嶋神前当座」とあることから、
神前にて当座和歌会を催し、法楽を行ったものであろう。祐心・安柄・盛
誓・九佐・盛政・空盛・宗柳・宗也・良鉄・頼長の一〇名が和歌を詠んで
いる。

II 慶長五年「陪八月十五夜月宴歌合和歌」

料紙は鳥の子で、二四・二糰×八〇・九糰。横長の八〇糰を超える一紙
に書かれ、本文は一筆である。保存状態は、総じて良好である。

E 「陪八月十五夜月宴歌合和歌」

慶長五年八月十五日、十五夜月宴和歌会の歌一〇首である。冒頭に「陪八月十五夜月宴歌合和歌」とある。この懐紙は、一〇の歌題で詠まれた一〇首を左右に分けて五番の歌合に仕立て、「勝」・「負」・「持」の判を付したものである。歌の行間を統一、整然と清書したものであるが、一〇首には行間の左右に本文と同筆の書人が一筆で記されている。和歌の右側に付された書人は、例えば「一番左」の歌の「…やはせん」の「ん」に「ぬ歎」と付すなど、表現に関する疑問を記したと考えられる。一方、左側の書人は、行間が不統一であることから、後から書き入れたと想定される。左の書人の内容は、右の書人に対する答えや、和歌に対する表記や表現に関する批語など、作者に対する指導的な内容の書入である。一〇首の題で詠まれた和歌をまとめて編集・清書した後には、勝敗やその理由等を判詞の形で批語を後から書き入れたものであろうか。

一 連衆

連歌会・和歌会に参加した連衆を一瞥するために、作品A～Eの順に登場人名の初見を拾って配列した一覧表の表1と、参会数や句・歌の合計数が多い順に配列して再整理した表2を作成し、検討を加える。

表2から明らか通り、宗柳・祐心・盛誉・空盛・盛政の五人に九左を加えた計六人は、「書留」すべての連歌・和歌会に名を連ねており、玉津嶋法楽の旅に同行した堺連衆であると思われる。また、九左を除く一人は、合わせて一〇以上の句・歌を詠んでおり、良鉄・宗也は三つの会、

九閑・頼長・英劔・賀月は二つの会に参加しているが、それ以外は、四つの会すべてに名を連ねている。そこで、これらの連衆について、貞享五年序、畠山箕山編の人名辞典『顕伝明名録』や新川家文書ほか、諸資料も併せて検討しておこう。

1 宗柳

天正十年頃から慶長六年にかけて堺連歌壇の中心となり、等恵以後、宗匠の役割を果たした「連歌師」である。^{〔詳〕}『顕伝明名録』には、「等恵弟子、下田屋」とある。天正四年（二五七六）九月二十五日『夢想連歌』から、慶長六年閏十一月二日の『何船百韻』までの作品が確認されている。^{〔詳〕} A～Dの会に出座し、百韻三巻ともに発句を詠んでいることから、連衆の中でも中心的な人物で、宗匠をつとめたと推定される。新川家文書の「伝受次第」^{〔1・217〕}によれば、新川盛政に古今伝受をした人物とされ、後述する祐心・盛誉・空盛らにも古今を伝受したという。小宮本『竹林抄』を筆写し、連歌論書『宗柳雑談聞書』と文禄二年の独吟『宗柳千句』の編著者である。『宗柳雑談聞書』には「泉州堺津十九屋の宗柳」とある。なお、『宗柳千句』には、文禄四年八月二十八日付の幽齋合点と判詞がある。

2 祐心

A～Dの会に出座している。堺の「連歌師」。『顕伝明名録』には「本願寺門下、堺住、号源光寺、自宗柳古今伝授」とあり、宗柳より古今伝

表1 連歌会・和歌会連衆一覧表 (作品順)

	A 慶長3.2.23 蟻通明神 法楽連歌	B 慶長3.2.19 市川九閑宿 連歌	C 慶長3.2.21 和歌山映森宿 連歌	連歌計	D 慶長3.2.22 玉津嶋奉納 続歌十五首	E 慶長5.8.15 八月十五夜月 宴歌合和歌	和歌計	出座 回数
宗柳	17	12	11	40	2	0	2	4
祐心	12	11	10	33	2	0	2	4
盛誉	10	12	11	33	2	0	2	4
空盛	12	11	10	33	2	0	2	4
盛政	11	8	6	25	2	2	4	5
賀月	8	0	0	8	0	2	2	2
頼長	9	0	0	9	1	0	1	2
箕庵	6	0	0	6	0	0	0	1
英劔	7	0	0	7	0	3	3	2
九佐	1	1	4	6	1	0	1	4
盛勝	7	0	0	7	0	2	2	2
九閑	0	9	9	18	0	0	0	2
宗也	0	7	9	16	1	0	1	3
一友	0	8	0	8	0	0	0	1
良鉄	0	9	9	18	1	0	1	3
重世	0	7	0	7	0	0	0	1
映森	0	0	8	8	0	0	0	1
小泉	0	0	7	7	0	0	0	1
恵休	0	0	1	1	0	0	0	1
友清	0	0	2	2	0	0	0	1
元泰	0	0	2	2	0	0	0	1
祐之	0	0	1	1	0	0	0	1
安柄	0	0	0	0	1	0	1	1
盛次	0	0	0	0	0	1	1	1
小計	100	95	100	295	15	10	25	52

表2 連歌会・和歌会連衆一覧表 (出座数、連歌・和歌数順)

連衆	B 慶長3.2.19 市川九閑宿 連歌	C 慶長3.2.21 和歌山映森宿 連歌	D 慶長3.2.22 玉津嶋奉納 続歌十五首	A 慶長3.2.23 蟻通明神 法楽連歌	E 慶長5.8.15 八月十五夜月 宴歌合和歌	出座回数	連歌・ 和歌数計	『顕伝明 名録』収 載の有無
盛政	8	6	2	11	2	5	29	○
宗柳	12	11	2	17	0	4	42	○
祐心	11	10	2	12	0	4	35	○
盛誉	12	11	2	10	0	4	35	○
空盛	11	10	2	12	0	4	35	○
九佐	1	4	1	1	0	4	7	
良鉄	9	9	1	0	0	3	19	
宗也	7	9	1	0	0	3	17	
九閑	9	9	0	0	0	2	18	
頼長	0	0	1	9	0	2	10	
英劔	0	0	0	7	3	2	10	
賀月	0	0	0	8	2	2	10	
盛勝	0	0	0	7	2	2	9	
一友	8	0	0	0	0	1	8	
映森	0	8	0	0	0	1	8	
重世	7	0	0	0	0	1	7	
小泉	0	7	0	0	0	1	7	
箕庵	0	0	0	6	0	1	6	
友清	0	2	0	0	0	1	2	
元泰	0	2	0	0	0	1	2	
恵休	0	1	0	0	0	1	1	
祐之	0	1	0	0	0	1	1	
安柄	0	0	1	0	0	1	1	
盛次	0	0	0	0	1	1	1	

※出座回数と連歌・和歌数とは、前者を優先した。

受を受けたとされる。東北大学付属図書館所蔵狩野文庫「古今大事」の奥書によれば、「右本考 夢庵老師御自筆本宗柳写給処、亦書仕処也、慶長七年十二月下旬祐心判」とあり、肖柏自筆本を宗柳が写し、それをさらに祐心が書写したことがわかる。注1 宗柳は、肖柏自筆本を書写することが可能であり、その写本を祐心に写させていることから、肖柏から宗柳を経て祐心に至る道統が継承され、宗柳から祐心へと堺伝受が継承されたことがわかる。祐心は、源光寺（現堺市寺地町東）十世であるとともに、円光寺（現大阪市天王寺区）五世でもあった浄土真宗の僧侶だった。円光寺の寺歴について記す最も古い史料「祐心遺言状」には、「屋敷奉行かさま六右衛門と申仁、即拙者之和歌伝受の弟子」、「志方四郎左衛門尉と申仁、我等之和歌伝受之弟子」、「淀屋个庵、和歌道伝受之弟子」とある。注4 大坂随一の豪商、淀屋个庵に和歌道を伝受したとあるが、『堺市史』第七卷（別編）には、祐心が个庵に古今伝受した系図が収録されている（同巻349頁所載の第66図版）。また、泉州大津（現大阪府泉大津市）長泉寺明誓の和歌の師でもあった。注5 その他にも幅広く和歌を伝受していた人物であったと考えられよう。

3 盛譽

A～Dの会に出座している。堺の「連歌師」。堺天神の社僧で、西坊を号したという。『顕伝明名録』に「堺天神社僧、号西坊、自宗柳古今伝授、了休息イキ」とあり、宗柳から古今伝受を受けたことがわかる。近年、箕田将樹氏の論考により、堺天神松南院の院主であることが指摘されて

注6 いる。新川盛政が記した「盛政駿河下向記」の和歌や狂歌等に合点を付注7 しており、新川家文書には他に盛譽自身の和歌・発句を記した懐紙が残注8 る。「台徳院殿堺御政所江入御之旧記」によると、日光東照宮造営のため、堺浦より神石を運ぶ際、日光まで寺惣代兩人が供奉し、道中日々々楽したとされるが、「此時之惣代式人」のうち一人が盛譽だという。なお、松南院は、堺を詳細に記録した「元禄二年堺大絵図」に描かれた堺天神社の中に確認することができる。注10

4 空盛

盛譽同様、A～Dの会に出座している堺天神社の社僧で、堺の「連歌師」である。『顕伝明名録』によると、「堺天神南坊、自宗柳古今伝授」とされる。盛譽同様、箕田将樹氏により、堺天神吉祥院の院主であることが指摘されている。吉祥院も「元禄二年堺大絵図」で確認できる。

5 盛政

A～Eすべての会に出座しており、特にEの和歌会の中心となった人物である。新川家三代目当主。通称を三十郎といい、根来寺入寺期の法名を三慶という。出自は和泉国中庄の地侍三善家。永禄六年（一五六六）頃、父三善盛喜と母新川又七女との間に生まれ、父とともに中庄新川家の礎を築いた人物である。十二歳の頃に根来寺へ入寺し、文武両道を会得した。天正十三年（一五八五）三月の豊臣秀吉の紀州攻めによる根来寺破滅の後、秀吉の弟、大納言秀長に出仕、本貫中庄で知行を得た。天正

十九年、秀長没後に家中を離れて貝塚（現大阪府貝塚市）に隠棲、貝塚寺内ト半家の祖、ト半斎了珍の女宗貞と婚姻し、新川姓に改姓、泉南地域に勢力を誇った新川一門に連なつた。慶長二年（一五九七）頃、小堀新介正次に登用され、宮内少輔に任官した。盛政の生涯は、子息盛明が盛政没後に追懐して綴つた「新川宮内少輔盛政伝」によって詳しく知ることができ^{〔註〕}る。

また、盛政は堺の古今伝受を受け、和歌や連歌等の作品を残した。

『明翰抄』所載の「堺古今伝授之図」や『顕伝明名録』に「佐野三十郎、後宮内」としてその名をみる^{〔註〕}ことができ、常信から古今伝受を受けたとされる。この『顕伝明名録』等の記載から、『堺市史』などでは佐野^{〔註〕}苗字だと誤認されているが、新川家文書の「伝受次第」（新川家文書1・217）によつて、盛政が宗柳から正式に古今伝受を受けた事実が確認できた。前述した通り、新川家文書には、盛政が書き綴つた紀行文「盛政駿河下向記」ほか、和歌・連歌等の作品が残されている。

6 九佐

句数が少ないものの、AとCの百韻それぞれの一巡最後に句を詠み、Dの玉津嶋法楽和歌会にも参加して一首詠んでいる。『顕伝明名録』や『明翰抄』に記載はないものの、堺連衆の一人で、執筆をつとめたのではなからうか。

7 宗也

B・Cの連歌に参加し、Dの玉津嶋法楽和歌会でも一首詠んでいる。詳細は不明であるが、「連歌・演能・雅楽データベース」によると、天正四年九月二十五日「夢想百韻」に等恵・宗柳とともに一座し、五句採用されている。「宗也」がみえる。この人物は堺連衆の一人と考えられ、当該の宗也にあたる可能性が高いと思われる。

8 良鉄

B・Cの連歌に参加し、Dの玉津嶋法楽和歌会でも一首詠んでいる。詳細は不明であるが、「連歌・和歌会書留」からうかがえる彼の動向は、宗也と共通するといえよう。

9 九閑

B・Cの作品に出座している。Bに「市川九閑宿」とあり、脇句を詠んでいることから、亭主を務めたと考えられる。九閑宿のBで宗柳が和歌浦の発句を詠んでいること、Cの和歌山映森宿の連歌に九閑も参加していることから考えて、和歌浦・和歌山に近い紀北在地の人物であろうか。

10 頼長

AとDの作品に参加していることから、中庄新川家と玉津嶋に何らかの関係をもつと推察されるが、現在のところ、詳細は不明である。しかしながら、盛政に関係する人物で「頼」の字を名にもつ人物に、勧進僧

松室坊頼真法印という人物がいる。頼真は、慶長十五年八月の佐野本郷

惣鎮守中庄大宮大明神社（現奈加美神社）の本殿造立にあたって勸進を務め

ている。^(注12)頼真は、元和元年ごろと推定される「詠九月十三夜月和歌」に

賀月・盛政・雅楽（盛好、盛政末子）・盛明（盛政嗣子）らとともに和歌を詠ん

でいる（新川家文書6・32）。頼長は、この頼真と関係する人物ではなからう

か。松室坊は「中家文書」永祿七年の田地売券に「菩提谷松室坊明喜」の

名がみえるので、根来寺の子院であったことがわかる。^(注13)頼長は、頼真と同

じく元来、根来寺僧で、中庄などを中心に勸進僧として活躍した人物と

も推察される。また、彼が玉津嶋法楽に参加したのは、同社の勸進にも

関与していたためではなからうか。

一方、中庄新川家の親族等で催されたEの月宴和歌は別として、一つの

連歌・和歌にのみ名が見える連衆もいる。これらの人物は、それぞれの会

の連衆ではあるものの、それ以外の会に名前が見えない。

11 映森

映森は、Cでは「於和哥山森宿」とあり、宿を提供して亭主をつとめ、

宗柳の「浜の名の千里もかすむあしたかな」と名所千里浜を詠んだ発句

に、脇句を付けているので、和歌山城下の人物と判明する。

12 安柄

Dの玉津嶋法楽和歌会に参加、一首詠んでいるのみなので、現地玉津嶋

社の関係者であろうか。

その他の連衆はそれぞれの連歌が張行された宿の亭主に関わった在地

の人々で、大別してAの亭主盛政に関わる人物（賀月・照誉・盛勝・箕庵）、

Bの亭主九閑に関わる人物（二友・重世）、Cの亭主映森に関わる人物（小

泉・友清・元泰・惠休・裕之）に分けられよう。

次に、これらの人物がそれぞれの亭主と具体的にどのような関係にあ

るか考えるため、Eの新川家に関係する参加者を事例としてとり上

13 賀月

AとEに参加している。賀月は盛政実父で、三善盛喜である。法名は照

誉道慶、道号を賀月といい、Eでは「照誉」を称している。「中庄村長」^(注14)

とされ、中庄大高寺（現泉佐野市、大光寺）の大檀那でもあった。妻は佐野川

新川家（新川一門総領家）二代一好息女（法名深誉法馨妙心）であり、嫡子盛政

の婚姻を機に、新川一門化して新川姓を称した。新川家文書には賀月の

和歌懐紙が残る。^(注15)

14 盛勝

AとEに参加している。賀月の子息で、盛政の実弟である。和泉国侍多

賀氏（和泉下守護被官、奉行人）の娘と婚姻関係を結び、同氏を相続した。ま

た、土佐派絵師でもあった。彼の子孫は、中庄本村上出村の年寄筋となる。

15 盛次

Eのみに参加している。賀月の子息で、盛政の実弟。中庄湊浦平松氏の養子となり、後に和泉国人日根野氏の娘と婚姻し、同氏を相続した。彼の子孫は、中庄本村上出村の庄屋役を代々つとめ、幕末には画家日根対山を輩出している。

16 英劍

AとEに参加している。英劍については、慶長期の彼自身の書状が新川家文書にあり、中庄新川家に近い浄土宗の僧侶であったと考えられる（新川家文書16・193）。新川家との親密さからみて、中庄の檀家寺で、浄土宗の中本山であった大高寺の住僧だったのではなからうか。

以上、箕庵については不明ながら、右の四人にみられるように、Eに参加した者たちは、いずれも亭主新川盛政の近親、或いは親しい関係にある僧侶などであった。Eは慶長五年九月の関ヶ原合戦の一ヶ月前に催されたもので、盛政が出陣する前に近親や親しい者が集った、いわば壮行会を兼ねたような歌会であったと思われる、その参加者とAの連衆が重なることは多分に示唆的であろう。これに、中庄鎮守の大宮社に関わったと思われる10の頼長の事例を加えても、やはり彼らは盛政の身近にいた血縁者や地縁の関係者たちだったと考えられる。

こうしたA・Eの新川家の場合を事例とすれば、BやCに参加した人物たちも、それぞれの亭主に関わりが深い在地の地縁・血縁の人々だった

とみなしてよいのではなからうか。

二 まとめ

これまで「連歌・和歌会書留」及び「陪八月十五夜月宴歌合和歌」の書誌情報や内容を確認し、また登場人物等をあらまし考察してきた。総じて、前者は、慶長三年（二五九八）二月に堺連衆が連れ立って紀州玉津嶋へ下向、その和歌山滞在時、帰路途途（同月十九日、二十三日）に張行された玉津嶋法楽和歌会や三か所の連歌会をまとめた作品集であり、後者は、中庄新川家の近親と近辺地縁の人々が集って催された和歌会であった。

前者の「書留」に収められた連歌会は、その旅中に亭主を中心とした紀州和歌山・泉南地域中庄の在地の人々と堺連中との連歌を通じた文化交流の場であった。その点では、玉津嶋社での神前法楽和歌会も、同社関係者（勸進僧・神官カ）を含む点では同じであろう。それらは、これまで知られることがなかった、慶長初期における堺連衆の動向を伝えるとともに、地方文化に対する堺連歌壇の文化的役割も垣間みられるものである。

なお、近世の御所伝受では、天皇・上皇の古今伝受終了後、玉津嶋神社や住吉大社等に勅使を派遣、法楽和歌の短冊を奉納したことが明らかにされているが、^(註15) 国家行事として行われる天皇・上皇の和歌奉納という側面はさておき、こうした伝受終了後の玉津嶋など和歌の神（歌神）への法楽・和歌奉納は、古今伝受の一環として意識されていたものとは考えら

れまいか。とすれば、右の玉津嶋での神前法楽和歌は、堺伝受（宗柳）の道統を継ぐ誰かの古今伝授が終了した後、師弟の主だった者が連れ立って玉津嶋法楽のために参詣し、和歌奉納を行ったと考えることもできよう。また、その誰かとは、堺連衆の参加者の顔ぶれや前後の関連から推定して、新川盛政であったとみることも可能ではなからうか。

次に、Eの慶長五年に催された「陪八月十五夜月宴歌合和歌」についてであるが、判者は不明なものの、基本的には中庄新川家の近親や親しい僧侶等が中秋の名月に集って詠んだ作品である。ここで注目すべきは、その日付が関ヶ原の合戦直前のちょうど一ヶ月前にあたることである。関ヶ原の合戦では、新川盛政は、主君であり、本貫中庄の領主でもある小堀家（遠州正一の父新介正次）に従い、東軍方として参陣している。関ヶ原に出陣する盛政本人も、西軍方の本拠大坂に近い泉南中庄に残って留守を預かる新川一門衆や親族たちも、互いに命がけである。そうした背景を考えれば、この歌合も実に意味深い歌会であるといえよう。^{注16}

〔注〕

- (1) 木藤才藏「室町後期の地方連歌」『連歌史論考』下明治書院 1999年。
- (2) 島津忠夫「連歌壇から俳壇へ」『島津忠夫著作集』第二巻和泉書院 2003年。
- (3) 「古今大事（柿本人丸事蹟）」『東北大学付属図書館所蔵狩野文庫マイクロ板集成』695。
- (4) 摂津国寺院史料研究会「圓光寺所蔵祐心遺言状について」『寺内町研究』第3号 貝塚寺内町研究会 1998年。
- (5) 前掲注(4)、『堺市史』第五巻堺市役所清文堂復刻版 1977年。

- (6) 箕田将樹「平間長雅の箱伝受と『堺浦天満宮法楽百首和歌』」『上方文芸研究』5号 2008年、西田正宏「堺と古今和歌集―古今伝授をめぐって―」『大阪女子大学上文化研究センター研究年報』第4号 2003年。
- (7) 鶴崎裕雄「『新川盛政駿河下向記』の史料的研究」『調査研究報告』第36号 国文学研究資料館 2016年。
- (8) 年未詳「和歌三首并元旦発句懐紙」新川家文書 1・222。
- (9) 「台徳院殿堺御政所 入御之旧記」『堺市史』第五巻 276頁 堺市役所清文堂復刻版 1977年。
- (10) 前田書店出版部編『元禄三己巳歳 堺大絵図』前田書店 1977年。
- (11) 近藤孝敏「中世末―近世初頭の「中庄新川家文書」」『泉佐野市史研究』第9号 泉佐野市史編さん委員会 2003年。なお、盛政については、山村規子・大利直美「『難波草紙』再考」鶴崎裕雄編『地域文化の歴史を往く』和泉書院 2012年も、参照。

- (12) 『泉佐野市史資料第一集 泉佐野市内の寺社に残る棟札資料』泉佐野市史編さん委員会 1998年。
- (13) 『熊取町史』史料編 I 366頁 熊取町史編纂委員会 1990年。
- (14) 元和元年八月十五日賀月道慶「詠八月十五夜月和歌」新川家文書 1・134。

- (15) 鶴崎裕雄「解題―玉津島神社と奉納和歌―」鶴崎裕雄・佐貫新造・神道宗紀編『紀州玉津島神社奉納和歌集』玉津島神社 1992年、同「住吉大社奉納和歌と古今伝授」『すみのえ』204号 住吉大社 1992年、同「古今伝授」国文学研究資料館編『古典籍研究ガイドランス―王朝文学をよむために―』笠間書院 2012年、参照。
- (16) 鶴崎裕雄「関ヶ原合戦前夜―歌合と続歌―（短詩文芸漫念筆75）」『やどりぎ』平成

【翻刻】

凡例

〔付記〕この翻刻と解題を執筆するにあたり、鶴崎裕雄・小高道子両先生には懇切なご指導を給わり、また中庄新川家文書研究会の近藤孝敏・山村規子両氏には様々な点で細部にわたるご教示をいただきました。合わせて感謝申し上げます。また、所蔵者の新川勲子氏をはじめ新川家のご家族・ご親族の皆様には大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。

一、ここに翻刻・紹介する資料は、「中庄新川家文書」の慶長三年二月「連歌・和歌会書留」（1・72）及び慶長五年「陪八月十五夜月宴歌合和歌」（1・183）である。

一、「連歌・和歌会書留」の校合には、二種の大坂天満宮文庫写本「古中古連歌千六百句」（れ甲・14）・「連歌七百韻」（れ5・17）を用いた。異同については、本文の右傍に（煩雑な場合は※印を付して本文の下に）、それぞれ〔甲〕・〔れ〕或いは〔甲・れ〕と略して示し、異同を（）内に表示した。ただし、語意に違いがある場合や、破損箇所文字比定などの場合を除き、煩雑になるので、漢字と仮名の置き換えについては省略した。

一、人名の比定等については、最小限で（）内に示し、傍注を補足した。

一、漢字は原則として、現行通用の字体を用いた。ただし、原文の雰囲気伝えるため、一部旧字体・異体字を残した箇所がある。また、仮名は変体仮名を用いず、通常、片仮名とする字体も含めて、平仮名で統一して表記した。

一、虫損や摩滅、抹消等で判読不可能な場合は□□或いは「」で示した。また、抹消部分（ミセケチ部分）には左傍に「ク」を附して表示した。

一、丁移りは、各丁表裏の冒頭行の下部に（二丁オ）のように示した。

1 慶長三年二月「連歌・和歌会書留」

何船

慶長^{甲社(三年)}二月廿三日^{甲社(於新川宮内少輔宿)}於宮内小輔宿^{新川盛悠}
蟻通大明神へ法楽

(二丁オ)

舟路の末のはるかなる空

頼長

いつくをか都の山とかへり見ん

宗柳

かすみにこゆるしら川の関

盛誉

一えたをたをるおしむな花の宿

盛勝

こゝろのとかにめくるさかつき

英劔

けふまれのあらはしりを思へとや

盛誉

めしにしたかひあふきみる影

頼長

ほとくにすゝみもて行つかさにて

盛政

うき事はたゝ身ひとり^{甲社(二)}のうへ

宗柳

物おもふ夕よ秋と月もしれ

盛誉

萩のをとにも袖はぬれけり

祐心

ふるさとの梢のした葉かつちりて

宗柳

露しくれゆく空そさひしき

空盛

やゝさむし雲に嵐やすさふらん

盛勝

尾上のいつこ鐘ひゝく暮

箕庵

分来つゝ行をとおもふ初瀬路に

空盛

いのりしはたゝかひあれとのみ

宗柳

書をくる其ことの葉はたかはめや

英劔

人はなにをかふしとなしぬる

祐心

かた^{二丁オ}いとよるゝ待をとひもせて

宗柳

ねさめならひしあかつきの鳥

盛政

ゆみはりの月は雲にも残るらん

頼長

(二丁オ)

(二丁ウ)

(三丁オ)

(二丁ウ)

いと、しく秋やかなしき我か思ひ

箕庵

まくらしほるゝ夜なゝの露

盛政

をろかにも月をこゝろの恨にて

賀月

みちはこけ地に寺そ奥ある

宗柳

かけはしやふりて往来のたえぬらん

空盛

いほりあはれに見ゆる谷の戸

盛勝^(多賀)

はけしくも山は嵐に暮初て

祐心

柴おひかへる袖の寒けさ

九佐

ほ^{うら}ともなく雲ははれ行冬の日に

英劔

しくてけさはすくるをちかた

箕庵

いつの間にかはりもやする虫の声

頼長

一むらうすすくゝき散しく

賀月^(多賀)

秋かせやかりねの夢をさそふらん

盛政^(新川)

たひ人いつる月は有明

空盛

雪かすむ山すそ小野に鳥鳴て

盛誉

はやし木ふかく梅にほふ春

祐心

花もありとをしいつれかはつ桜

宗柳^(山田)

きり間にとをき高円の山

行て見ん小萩かもとの露の暮

つゝくをしかのこゑそさかしき

狩人にいかり猪とてもおそるらし

いしにいる矢もたつとしそ聞

おもへとも心のおくはかたかれや

忍ひてかよふみちあらまほし

いとひてもいとひかぬるは浮世にて

花にしあらし春の山かせ

さくらさく其おもかけや残りけん

かすみのうちになひく白雲

かへりゆく鴈の一つらうち鳴て

なにかうへにも旅や物うき

またなれぬ野路のかりふし磯枕

岩うつなみそ玉にくたくる

千々におもふ心やよそにもれつらん

たのめし中もつらくなりにき

いひさけぬたかさかしらのみたれかみ

わかれつるよりおもかけにたつ

しのゝめの月に残りし夜半の雲

山松かえにかゝるうす霧

盛誉

空盛

賀月

祐心

盛政

頼長

宗柳

盛勝

空盛

賀月

祐心

盛三

英劔

宗柳

頼長

盛政

宗柳

箕庵

祐心

宗柳

盛政

(三丁ウ)

宇治てふさともみやとはまし

わひつゝもすむわか庵を人もしれ

ひくねもよはきあつまことのを

ねたむにも笛に心やあはすらん

ひとりとはとかしむすふ下ひも

はちかはす思ひにいと、あくかれて

かたらひはかないはけなきとち

都出てすみやはつへき遠つ国

身にたのまはみよしの、奥

引かへてた、あらましの墨の袖

花のころもになれしをは見つ

さほ姫の霞のうちに月見えて

春のくれこめかへる鷹人

すむ里は山をかけたる水無瀬河

す、しさいかにおつる瀧なみ

五月雨の雲はことさら打つゝき

かほりてふかしあふちさく陰

もとむるに得かたき法とおもふな

ころもにえやは玉もなからん

うきはた、人を見ぬめのわか涙

くもりし月に君は来まさす

宗柳

空盛

盛勝

盛誉

頼長

賀月

宗柳

盛政

空盛

英劔

祐心

賀月

盛政

宗柳

盛誉

箕庵

祐心

空盛

宗柳

盛誉

英劔

(五丁オ)

(五丁ウ)

(六丁オ)

きかはやとのみ初かりのこゑ

祐心

村鳥のわたるそのふは露ふかみ

盛勝

草葉も色に此ころのあき

空盛

山もとの田つらに残る入日影

宗柳

うちつれ行もいそかれそする

頼長

引すつる雲ははるかにへたつらん

賀月

そよきたちぬる木からしの風

盛勝

なら柴に見ればあられの打ちりて

盛誉

わひしらましらさけふあはれさ

盛政

西川やありし御幸のあとならん

祐心

さかのおくにもみちは残りぬ

宗柳

世々までもよむも尽せぬ家のまき

英劔

影きよかれや窓のともし火

盛政

心にしいむてふ事のたえやらす

盛政

はらへとも又おほふうき雲

箕庵

花かくす霞を袖に山わけて

盛誉

ほからかにしもあそふ春の日

賀月

宗柳 十七 祐心 十二 盛誉 十

空盛 十二 盛政 十一 賀月 八

頼長 九 箕庵 六 英劔 七

盛勝 七 九佐 一

何人

慶長三年二月十九日

於市川九閑宿

和歌の浦や松に残りの雪もかな

宗柳

あし辺の田鶴の長閑なる声

九閑

みつしほにかすめる月のうつりきて

盛誉

夕日すくなき山きはの道

祐心

さと遠き旅の向後の一時雨

盛政

しはしまくさを野にかへる袖

空盛

そことしもき、はわかれす虫鳴て

宗柳

身にしむはかり空のあき風

一

をく露やす、きか本もとに乱るらん

良鉄

きりたちわたり暮そふかむる

重世

月しろは見えてもをそき山のはに

九佐

うきかり枕いまわかれん

宗柳

浅からぬ人香は袖につ、みもて

九閑

忍ふもわか名よそにもれまし

盛誉

花にとふゆかりにはあふ草の庵

祐心

うき世の春にのこるあらまし

盛政

かへらんをおしみそきつる天つ雁

空盛

すむやまふかく引やからこと

宗也

岩かきのしけるもた、水こえて

一友

布さらすやと見ゆる川つら

良鉄

(甲・社) 盛政

(七丁ウ)

(六丁ウ)

(七丁ウ)

(甲・社) 宗柳

(八丁ウ)

(九丁オ)

ねられすもあらしなからに明はなれ

重世

冬の夜かなし木葉ちるをと

枯心

なみたたゝもろくなり行手枕に

宗 (甲・社)

月をかたみのきぬくゝのあと

空 (甲・社)

声になをなくさめかねつきりくゝす

盛政

山下小萩うつろへる比

九閑

しらきくや秋をふかめて匂ふらん

盛誉

吹あけとをくけふる露霜

宗也

詠れは波もなくさの浦つたひ

良鉄

あけて小舟そさしうかへたる

一友

すさひつる嵐も風によはるらん

盛 (甲・社)

うらみやらしの心とをしれ

空 (甲・社)

玉つさに見えてかひある思ひかは

宗柳

まれなる中の人の音信

枯心

かはらんとなさけやかけしおほつかな

空盛

いつまでかくはなからへもせん

良鉄

あふきつゝ君か千とせにあらまほし

枯心

うへそへけりなすみよしの松

盛誉

みるくもいやふる雪ははらはれす

一 (甲・社)

いかなるかたに駒をとめまし

宗 (甲・社)

いもかりにゆけは心を空にして

良鉄

おもひかねてはあくかるゝくれ

空盛

(十丁ウ)

さかりなる花を野分やしほるらん

宗柳

きのふにも似ぬあきの山雲

九閑

かたふきぬこよひの月は猶もおし

重世

たなはたつめはまれの契りそ

盛政

かたれたゝへたてなきこそ友な (甲・社)

宗 (甲・社)

たれもむかしをおもひ出けり

盛誉

浅茅生に春を忘れぬ花を見て

盛誉

かすむともよしあし引の山

一友

岡こえの道のしるへやよふこ鳥

空盛

たつきもあらぬ旅はうからん

盛誉

風あれてよるかた遠き沖つ舟

枯心

なまめかるゝもそれと床しも

良鉄

わすられぬ (社) 影と見るをみなへし

空 (甲・社)

わけしさが野のかへるさの月

宗 (甲・社)

ふるさとの秋をおもへは哀にて

良鉄

夢のうちにも夢の世そかし

九閑

暮やすき春を小蝶やしたふらん

宗柳

青葉に二つ三つもなき花

一友

ちり残る藤をやよひの名残にて

盛誉

ちりうちはらふ池のさゝなみ

重世

をしかものともねにおるゝ数おほ (甲・社)

空 (甲・社)

往来たえたるみちの一すぢ

空 (甲・社)

(十二丁オ)

※甲(癸)
(十一丁ウ)

(十二丁オ)

ふしおかむ神のゐかきの前渡り

もみちにましる袖の色く

かりはこふ秋の山柴露ふかみ

きり間たひく時雨ゆく比

ゆひをさすめちをはなるな三日の月

あたにはせしの法のことわり

生るは稀なる身としきく物を

たのしひさまて天にすむ人

をよはぬもかくる心や大和うた

おもひをつくす恋はかなしも

一筆も今は何とかかきかへん

まつにつれなく時は過てよ

橘もちらはあやなし郭公

音すさましき五月雨の雨

軒ちかくたえぬなかれや滝つ波

いつくかうつす庭のつきやま

ふるき絵の残る跡こそあはれなれ

かしこかりしもとめすはやは

たしきにおさまる国の政

こゝろよこひになとみたすらん

かたいとのよるくわふる物おもひ

けふりはうすき袖のそらたき

九閑

空盛

盛誉

祐心

九閑

良鉄

宗(甲・れ)
宗(甲・れ)

宗也

空盛

重世

一友

宗柳

盛誉

宗也

九閑

祐心

宗柳

盛政

盛誉

空盛

重世

立ちかへる雲は高ねの夕間暮

とまりやまにはいかにかり人

あられちるすのしの原さむき野に

ならのかれ葉そ風にさひしき

さやかにもねやもる月に目はさめて

ひとりあかせはいと、夜なかき

まきかへしおもひをこめてうつ衣うら

袖にそあまる露ならぬつゆ

身にうきは君か心の秋にして

一友

良鉄

宗柳

空盛

祐心

盛誉

九閑

盛政

盛誉

(十四丁表・裏空白)

何船 慶長三年二月廿一日於和哥山森宿(讀取)

浜の名の千里もかすむあしたかな

のこるもうすき春の夜の月

花にねぬ宿の灯影ふけて

空いつくより風わたるらむ

ゆくくも猶さむかれや旅の袖

分くらすなる野路のはるけさ

急雨の雲は見るくやま越て

ほと、きすをそ又またれぬる

かたえよりちれば咲つく卯木原

(十三丁ウ)

(十五丁オ)

(十五丁ウ)

ところくをかきはなるさと
 露にいまふりかはりぬる秋の霜
 月にしあらぬひかりもそそふ
 さひしくもうつ音すなりさ夜衣
 誰すむとなき浅茅生の陰
 くる、より折たくしはしたえやらて
 雲ふきかへす風のはけしき
 日影さすみねにや雪の晴ぬらん
 松はふもとに時雨てそ行
 うつ蟬のなきたつかたはちかかれや
 しのふもそてのなみたにやしる
 なにとなく人待暮の我かおもひ
 あふまでとのみたのむなかたち
 今宵しも月にむかへはものさひし
 秋はかきりの岡のへのいほ
 霜ははやおくての稲葉かり直し
 鳴たつあとの水のひとすち
 はるかにも沢ゆくなかれ橋見えて
 末をそおもふ東路のたひ
 憂事もみやこ出すは誰しらん
 すたれにのこるけさのおも影
 忍ふればよそ目あやしき小車に

良鉄 九佐 柳 森 心 閑 盛 誉 政 也 鉄 佐 惠休 政 柳 泉 心 盛 誉 鉄 佐

(十六丁オ)

(十六丁ウ)

こふるあたりは風もなつかし
 むらくりに打なひきたる柳陰
 雲もさくらのかつらきのみね
 鶯のこゑよりかすむ夜は明て
 夢はさめつゝ出るかりふし
 かへるさになれは心もいそかれぬ
 た、んうき名を猶おもふ中
 契りしも初はあさき物なれや
 くみこそなるれ山の井の水
 入てより日数ふりぬる室の戸に
 あはれは雪の小野のさと人
 道くをあまりなけくはくるしくて
 あすをもしらぬ浮世かなしも
 さきしより風待花をおもへた、
 をく露ふかき松の藤かえ
 波かすむ砌の池に雨落て
 く、るや水にあそふにほ鳥
 ひとりのみ月をよすかにいさなひぬ
 なみたわひしき長夜の床
 とひくやとこ、ろさはかす萩のこゑ
 なかはに過し年とこそなれ
 徒にふり行我身いか、せん

森 閑 誉 盛 也 政 心 閑 柳 也 誉 友清 森 柳 盛 心 誉 泉 盛 佐 泉 誉

(十七丁オ)

(十八丁オ)

けふも聞ぬる入相のかね

元泰

花に日をしつけく道は春の山

盛

さへつる鳥のちかき柴の戸

心

外面にはつみかし雪や残るらん

柳

いくたひなれやさゆる半天

也

木からしに月は澄つ、夜は更て

誉

まくらとるまに秋のうた、ね

閑

露を袖に物おもふわさと人は見よ

盛

身にしむきりのたちもこそゆけ

森

野をひろみ夕ぐに打出て

祐之

さくらんとのみとこなつの色

泉

す、しきはちりをもすへぬ莓の庭

誉

水は岩こす音のさやけさ

柳

道遠みつかれやすと駒とめて

鉄

をくる、あとの友をこそまで

也

詠れはつねに雲いる高ねかは

閑

よ川の奥にふかき杉村

心

聞たにもをこなひ人は哀にて

友清

ぬかつくこゑそ翁さひたる

誉

衣々の末もかはるなうき契り

也

こゝろみたれは月にかこたん

鉄

花す、きほに出てこそ見るへけれ

閑

野はむし鳴て暮初る空

盛

とひよれば今身のさかのいかはかり

泉

奥なる山に庵やしめまし

柳

炭かまのけふりかすかに打なひき

泰

沖にみなれぬ浪ぞ立行

森

追風やまかちしけぬく松浦舟

也

袖ふりかへししたひもやせん

鉄

たのめても末しらぬこそ何はなれ

心

身にあふまてのいのちともかな

誉

もりきしの恵みをおもふ君か代に

柳

十代の小田もつくりかよはん

鉄

里人は夕に笠をかたふけて

森

おちふれきてのすかた何そも

閑

あさくまやか、みの宮の仰みん

鉄

水吹なかし清き神かせ

政

うかひつ、浪に涼しき秋の月

心

やなきの下葉今やちるらし

柳

夕きりのしつくは露のふか□□て

閑

霜をきわたすかけはしの末

森

見てもさへのほらはいかにつ、ら折

政

たく火のかけのうつる古寺

也

磯きはに舟やとめけん難波かた

柳

(十九丁ウ)

(十九丁オ)

(十八丁ウ)

(二十丁オ)

(二十丁ウ)

(二十一丁オ)

入江を遠みしほそみちくる

心

花あらはいつくとてしもゆかまほし

鉄

ともなひあかぬとしくの春

盛

宗柳 十一 映森 八

祐心 十

小泉 七 友清 二

九閑 九

空盛 十 盛誉 十一

盛政 六

宗也 九 良鉄 九

九佐 四

惠休 一 元泰 二

祐之一

(二十二丁ウ)

続十五首和哥

行路霞

山かくす春のかすみをはるくと

わけてのき路の旅をしそおもふ

祐心

(二十二丁オ)

餘寒雪

山松の木すゑもさえてふる雪は

おのへにかすむ花かとそおもふ

安柄

山家梅

朝ほらけ霞みわけゆく山さとは

立よるはかり梅か香そする

盛誉

(二十二丁ウ)

浦春月

花ならはおりてや見せん見ぬ人に

和哥の浦半の春のよの月

九佐

帰雁遥

古郷の春いかなれはかりかねの

秋来し空にかへり行らむ

盛政

遠見花

かすめるを花のしるへとなかめせん

遠山もとの春の明ほの

空盛

惜落花

磯山の松にましりてさく花を

あらしのさけふことをしそおもふ

宗柳

春山田

あら小田をあらすきかへしせく水の

なかれもすめる春の山さと

祐心

河款冬

やまふきのさきてかほれる川岸は

水にも春の色は見えけり

宗也

暮春藤

木々はみなうつろひ行は藤の花

かさせし春を残しつるかな

良鉄

関路鶏

見し関路の夢は鳥の

(二十四丁オ)

あらためて行旅の空かな

盛政

渡待舟

河なみになかれてをそき渡し舟

まちそかねたる春の夕暮

頼長

旅宿夢

夜なくの旅ねに見えし古里の

ゆめのた、ちにうつ、ともかな

空盛

海眺望

見ても又くもとそおもふ(歌)

南の海の春のあけほの

盛誉

寄神祝

こゝに神いつの世よりか跡たれて

あふききぬらん玉津嶋(山)

宗柳

ことはさに云

慶長三年二月廿二日

陪玉津嶋神前当座

2 慶長三年「陪八月十五夜月宴歌合和歌」

陪八月十五夜月宴歌合和哥

月多秋友左一勝

英劔

月かけの四方にあまねき秋の夜は

磯もともなひ詠やはせん(歌)

尤殊勝候、せぬと候てよろしく候歟、

月前松風右

照誉(百目通巻)

葛城や月をしかこふ木間より

琴の音かよふみねの松かせ

此御詠もよろしきやうに候へとも、

左の御哥いさ、かまさり候歟、

月下擣衣左二番

盛勝(百目通巻)

たくひなき月のひかりを待取て

あけはつるまでうつ衣かな

やすらかに候て珍重候歟、

海辺秋月右

盛政(百目通巻)

あま衣いか、しほる、松嶋や

夜ふかき月ともしほくむとに

面白候、しからは持たるへく候歟、

湖上月明左三番

英劔

秋風に水の水上霧はれて

ひかりさやかに月やすむらん

河上月・水辺月さても如此たるへき歟、湖の字の心いさ、か

有度候歟、

古寺残月右

盛政

法の師のぬかつくこゑも古寺の

軒端に月の残る比かな

右勝たるへき歟、

深夜暁月 左勝 四番

ふくる夜は入ぬと人やおもふらん

雲間にやとるあかつきの月

哥さま右よりはいさ、かまさり候歟、

野月露涼 右

野をひろみ千種にうつり来て

露の玉をく小篠す、しも

此御詠も難なく候、しかれども夏の歌にてもあるへく候歟、

田家見月 左五番

もる人も見てやをとろく秋の田のお

かりほの露に月のさやけさ

御詠よろしく候、露にと候てよく候歟、

河月似氷 右

山川のなかれにうかふ月影を

むすふ氷とたれか見さらん

此御哥も尤珍重候也、持たるへく候歟、

以上

慶長五年八月十五夜 詠之、

盛勝

照誉

英劔

盛次 目録野

「連歌・和歌書留」 表紙



